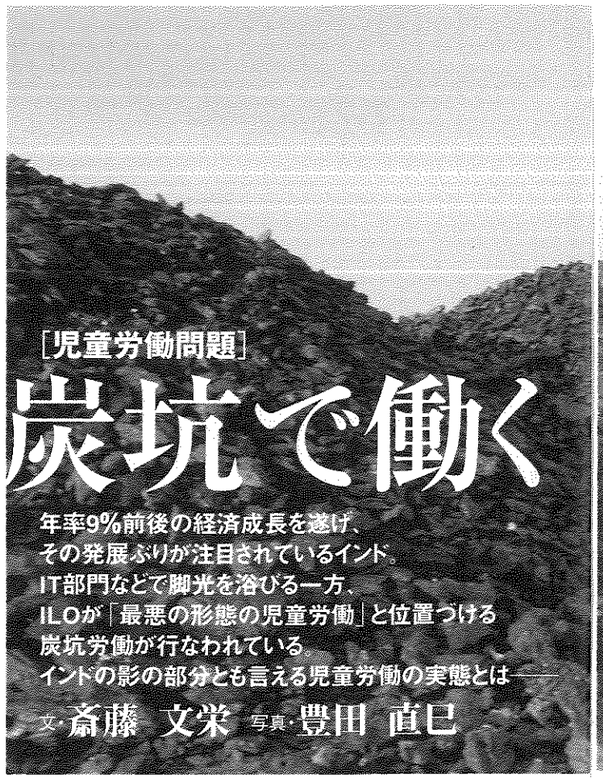
[児童労働問題]

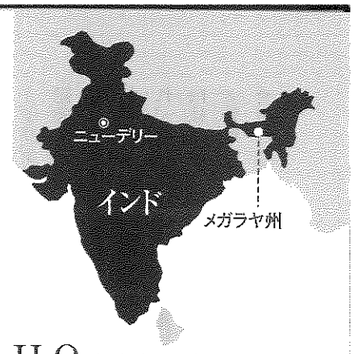
炭坑で働く子どもたち

年率9%前後の経済成長を遂げ、
その発展ぶりが注目されているインド。
IT部門などで脚光を浴びる一方、
ILOが「最悪の形態の児童労働」と位置づける
炭坑労働が行なわれている。
インドの影の部分とも言える児童労働の実態とは――

文・斎藤 文栄　写真・豊田 直巳



たらいのような容器に入れた石炭を、破砕機まで運ぶ少年。



ILO（国際労働機関）では、炭坑労働を最悪の形態の児童労働と位置づけ、児童労働の撤廃に取り組んでいる。しかしインド政府は、児童労働撤廃に向けたＩＬＯの主要な条約である、就業最低年齢を定めたＩＬＯ第138号条約も、最悪の形態の児童労働を禁止する第182号条約（10月末で172カ国が批准）も批准していない。これらの条約に関しては、ＩＬＯだけでなく、国連子どもの権利委員会や社会権規約委員会からも早期批准を求める勧告を受けている。

インド北東部、メガラヤ州ジャインティア丘陵地域の石炭採掘はここ数年で飛躍的に発展した。同地域だけで炭鉱は約五〇〇〇存在するという。現地で活動するインパルスＮＧＯネットワークによる推計では、この地区の炭鉱で働く子どもの数は約七万人。インド憲法や児童労働禁止法では一四歳未満、鉱山法では一六歳（一部一八歳）未満の労働が禁止されているが、実際には多くの子どもたちが働いている。中には八歳ですでに坑道に潜っていた子どももいる。

ジャインティアでは企業ではなく、土地の所有者である地元民が個人で自分の土地を掘り起こし、石炭を採掘している。実はそれがこの地域の児童労働に対する規制が遅れている大きな要因だ。なかなか監督指導が進まないのは、広範な自治を認められた先住民の土地利用の自由との兼ね合いで児童労働の取り締まりが難しいからだという。その上、地域の議員に炭鉱の所有者が少なくないことも規制が進まない一因だとインパルスは説明する。

落下は落命の危険

でこぼこ道を通り、炭坑らしき平地にたどり着くと、奥の方に実際に掘っている現場があると縦坑まで案内された。縦に深く掘られた炭坑の中を上から覗くと光が通らないため底が見えない。底まで大体七、八十メートルだという。地上から底までらせん状に備え付けられた階段は、むしろ梯子と言った方がいい。ところどころ手摺がなく腐っている上、湿って滑りやすい。後ろ向きに恐る恐る下りても足を踏み外しそうだ。

炭鉱で事故死する労働者の中には、この梯子を滑って落下する例も少なくない。縦坑の途中から地下水が流れ落ちているため、下では霧雨のようなものが絶えず降っている。ここで働く人たちはみな全身真っ黒だ。濡れた身体や衣服に石炭や泥がこびりつくからだ。

ガラガラガラッ。突然大きな音がして縦坑の底で四方八方に掘られた横穴のひとつから人が出てきた。子どもが二人、掘り出した石炭を荷車に積み上げて引っ張ってきた。驚いたことに何も防具を身につけていない。ここで機械化されているのは、底に積み上げられた石炭の山を地上に引き上げるクレーンだけである。彼らはツルハシとヘッドライトだけを持って穴に潜るのだ。いざという時、命を守るものは何もない。

坑道から石炭を採掘してくる作業に大人と子どもの区別はない。二人ひと組、時には子ども同士でペアを組んで穴に入っていく。坑道は小さいものになるとうつぶせにならない限り先に進めない。子どもが重宝される理由はそこにある。現地で「ラットホール（ネズミ穴）」と呼ばれる狭い坑道を掘り進めるには、身体の小さい子どもの方が適しているからだ。

「帰る道がわからない」

州東部に位置するジャインティア丘陵は、ネパール、バングラデシュからの出稼ぎが多く、炭鉱で働くのも、半数はその地域からの出稼ぎ労働者である。国外から来ている子どもたちに話を聞くと、多くは自発的に働きにきたと語る。しかし、その実態は、ブローカーが「楽して儲けられる」などとうまいことを言って誘い出し、炭鉱に連れてくるのだ。親を助けるためにお金を稼ごうとやってきた子どもは、「こんな危険な仕事だとは聞いてなかった。落盤が多くて怖いので辞めて帰りたいが、帰るための交通費がない」と言う。帰りたくとも帰り道がよくわからないという子どももいる。

炭坑での仕事は、常に危険と背中合わせである。坑道に落盤防止の坑木や空気を送り込む通風装置などの安全設備はなく、落盤による死傷者も絶えない。ある少年は「自分が採掘しているとき危険を感じて仲間と逃げたら、その直後に天井が落下してきた」と、さほど特別な出来事でもないという風に話す。昨年末には、坑道を掘り進めていったら川にぶち当たり、水が逆流してきたため、約八〇人がおぼれ死んだ事故があったという。

↑ネパールから来た少年。今日のノルマを果たして炭坑から雨の降る地上に出てきた少年は、寒さに震えた。

←炭坑の縦坑の底まで、横穴の坑道から掘り出した石炭を運び出してきた少年。

病気もつきものだ。坑道は石炭が取れる限りどこまでも延びていく。先に行くほど穴は細く、酸素も薄くなる。そのため、穴の中にいる子どもたちは呼吸器疾患を引き起こしやすい。筋肉疲労や、落盤で怪我をすることもしょっちゅうだ。

ネパールから来たという少年の住む場所を見せてもらった。彼らは炭坑のすぐ横に建てた掘建て小屋に集団で生活している。わずかな調理器具の他は、土間に木のベッドが備えられているだけだった。浄水施設や下水施設などはもちろんないため、食べ物や水にあたって身体を壊すこともある。病気になったら薬品を購入するか病院に連れていってもらうかだが、近くで売っている薬品は使用期限が切れていることもあり危険だ。病院は車で二時間余りかかる町にしかなく、全額自己負担になるのでなかなか行けないという。

諦念の宿る瞳

オーナーに反抗的な労働者を狭い炭坑の中に閉じ込め死亡させるという懲罰的体罰殺人が行なわれているとの話も聞いた。こうした処罰方法は他の炭鉱にも噂で流れ、労働者を萎縮させる。そのせいだろうか。作業の間、無駄口をたたく声は一切聞こえず、あからさまに不平を言う声も聞こえない。雇い入れにあたり身元の確認がされるわけではなく、その上あちこちの炭鉱を転々とするため、出稼ぎ労働者はたとえ亡くなっても身元がわからず、親元に知らせがいくこともないという。

インタビューの間、ネパールから来た一六歳の少年は、じっとこちらを見つめていた。ラットホールから出てきたばかりの彼は、頭からつま先まで真っ黒だった。唯一汚れていない大きな瞳には、半ば諦めにも似た感情が漂っているように見えた。

インパルスの働きかけで、一昨年、中央政府の国家子どもの権利擁護委員会がジャインティアの視察に訪れ、メガラヤ州に対し児童労働対策を強化するよう勧告した。しかし、州政府や地元の労働局からはいまだに何のリアクションもないという。

今回、インパルスと共同で現地調査を行なった国際人権ＮＧＯのヒューマンライツ・ナウ（ＨＲＮ）は昨年一〇月、東京都内でインドの児童労働に関する報告会を開いた。いかに世論を喚起し、国際社会を巻き込み、インド政府を動かすことができるか。それは私たちのこれからの取り組みにかかっている。

さいとう　ふみえ・ジャーナリスト
とよだ　なおみ・フォトグラファー